

I. 歓迎と振り返り

- A. おはよう! こんにちは! 歌を通して主であり救い主を賛美し、御言葉の学びを通じて主を知るために、皆さんと共にここに集まることができて嬉しい。
1. 初めてお越しの方や、オンラインで視聴されている皆さん、ようこそ。
- B. さて、今朝は、子供たちを日曜学校の教室へ送り出す前に、スクリプトチャー・ファミリーのために「赤ちゃんの奉献式」を行うという、素晴らしい特権と名誉に恵まれている。
1. しかし、スクリプトチャー・ファミリーの方々に前へお進みいただく前に、少し時間を取って、「赤ちゃんの奉献式」とは何か、そしてなぜ当教会でこれを行うのかについて簡単に説明したい。
2. 「赤ちゃんの奉献式」とは、家族が主を讃え、子どもという贈り物に対して主に感謝を捧げる機会である。
- a. 子供たちは主からの祝福である。詩篇127篇3節には、「見よ、子供たちは主からの賜物、胎の実りは報いである」(詩篇127:3 NASB)と記されている。
- b. 神はルークとサラ、そしてスクリプトチャー・ファミリーの皆に、家族の一員として新たな息子を授けてくださった。これで家族は5人となった。
3. 「赤ちゃんの奉献式」は、神に感謝し、神を称える機会であるだけでなく、ルークとサラが、この教会の信徒たちの前で、息子を主の道に従って育てるという決意と願いを公に表明する機会でもある。
- a. 箴言22:6にはこう記されている。「子をその行くべき道に教育せよ。そうすれば、年をとっても、そこから離れることはない。」(箴言22:6)
- b. 聖書は私たち、特に父親に対し、主の教えと戒めによって子供を育てよう命じている。(エペソ 6:4b)
4. 「赤ちゃんの献身式」は、その赤ちゃんの救いと直接結びつくものではない。カーク君は、自ら進んで主に従うことを選ぶ必要がある。それは、お父さんやお母さんが彼に代わって下せる決断ではない。
- a. しかし、両親にできることは、その時が来た時にカークがその決断を下せるよう、あらゆる機会を用意しておくことだ。幼い頃から聖書を読み聞かせ、教え続けることで、いつの日か聖堂の導きにより、カークが救い主を必要としていることに気づき、自分の人生を主に委ねるようになるだろう。
5. したがって、「赤ちゃんの奉献式」とは、実際には、父と母が主と教会の前で、息子を主の道に導き、彼が将来、主と共に歩む準備を整えることを誓う奉献なのである。
6. 「乳児奉献」は必須ではないが、聖書には、主とその奉仕に捧げられた子供たちの先例が見られる。
- a. 幼いサムエルは、両親であるハンナとエルカナによって、主とその奉仕に献げられた。ハンナは息子を授かるよう祈り、神は

その祈りに応えてくださった。それに対し、ハンナはサムエルを主とその奉仕に捧げた。(サムエル記上 1:27-28; NASB)

- b. また、私たちの主であり救い主であるイエスでさえ、幼子の頃、継父のヨセフと母マリアによって、律法に記されている通り、主に捧げられた。(ルカ2:22)

7. したがって、これは私たちに命じられていることではないが、その背後にある心構えについては聖書的な先例が見られる。神を敬い、神からの賜物に感謝し、その子を主の道に従って育てることを誓うことだ。
8. そこで、ルークとサラは今日、そのことを行うつもりだ。彼らはサミュエル・カーク・スクリプトチャーを主に捧げるつもりだ。
9. また、今日はスクリプトウル一家がカルバリーで過ごす最後の日曜日でもある。彼らは8月上旬に転勤(PCS)を控え、来週にはこの町を離れるため、赤ちゃんのカークだけでなく、家族全員のために祈りたいと思う。
- a. (スクリプトウル一家を前に招き、カークと家族のために祈る。特にカークを主に捧げるとともに、家族全員と米国への転居についても祈る。)

C. 話を進める前に、小学生の子供たちを日曜学校の教室へ送り出そう。

1. (第2礼拝: 聖書英語クラスも同様)

D. さて、ここ数週間、私たちはヨハネによる福音書第6章を進めてきた。

1. この章は、五千人の奇跡的な給食の出来事から始まっている。
2. その後、五千人の給食の夜に何が起きたか、そして弟子たちがどのようにして神の御心の中にあると同時に、激しい嵐の真っ只中に置かれたかを詳述した聖書箇所を検討した。イエスは水の上を歩いて弟子たちのところへ来られ、風と波を静め、彼らを無事に対岸へと導かれた。
3. 翌日、イエスは一般に「命のパンに関する説教」と呼ばれる教えを始められた。そこでは、五千人の給食の翌日にイエスの周りに集まった様々な人々に向けて語られた。
4. この説教、すなわち教えは、5,000人を養った奇跡が、人々をイエスへと導くしるしとして意図されていたことを説明するために用いられた。それは、イエスが天からの真のパンであることを示すしるしとして意図されていたのだ。父なる神によって天から送られた「いのちのパン」である。

E. 3週間前、この学びの第1部では、イエスが最初に語りかけた人々、すなわち前日の魚とパンを目撃し、それを味わった群衆について見た。

1. これは、天からのパンをめぐるやり取りだった。群衆はイエスに質問を持ちかけ、イエスは時間をかけてそれに答え、御自身が父によって遣わされた真の天のパンであることを教えた。

2. この人々はイエスを求めていたが、その理由は間違っていた。彼らは、イエスによって腹を満たされたからイエスを求めたのだ。彼らは、残りの人生、イエスに養われ続けたいと願っていた。
 3. そしてイエスは彼らの心を見抜いていた。彼らがイエスから学びたいとか、イエスに従いたいから求めているのではなく、ただイエスから得られるものを手に入れたいだけだ——つまり、ただで施しを受けただけなのだと思っていたのだ。
 4. この人々は肉적인パンを求めていたが、イエスには彼らに与えるべき、はるかに偉大なものがあった。イエスは彼らに、天からの真のパンを差し出したのだ。そして、イエスは、自分が差し出したそのパンが永遠の命をもたらすことを彼らに保証した。
 5. イエスは、ご自身が「いのちのパン」であり、御自身のもとに来る者は決して飢えることがなく、御自身を信じる者は決して渴くことがない、と大胆に宣言された。（ヨハネ6:35）
- F. そして先週、この学びの第2部で、イエスはカペナウムの地元の会堂に集まっていた群衆の中にいた宗教指導者たちに目を向けた。
1. 宗教指導者たちは、イエスがご自身について「天から下って来た」と語っているのを聞いたが、彼らにとってイエスは単なる大工の息子に過ぎなかったため、イエスを「人の子」や「神の子」として受け入れることはできなかった。
 2. イエスは彼らの不平を指摘し、不平や不満を言うのをやめよう命じた。
 3. さらにイエスは、自分こそが天からのパンであり、このパンを食べる者は永遠に生きることを彼らに語り、自分が与えるパンとは、世の命のために捧げる自分の肉であると宣言した。（ヨハネ6:51）
 4. 「天からのパン」をいただくこと、そしてイエスの肉をいただくというこの考えは、宗教指導者たちの不満をさらに募らせ、彼らと集団内の他の者たちとの間で口論を引き起こした。
 5. しかし、イエスは一歩も引かなかった。むしろ、人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたたちにはいのちがない、とさらに強く宣言した。（ヨハネ6:53）
- G. 今朝、「**天からのパン**」の第三部、最終回において、イエスは再びその関心を向け直す。
1. イエスはまず、食事を与えられた群衆に語りかけ、次に宗教指導者たちに語りかけた。今日の聖書箇所では、弟子たちと、彼らの説教に対する反応に焦点を当てることになる。
 2. 今日の聖書箇所は、ヨハネによる福音書第6章60節から71節だ。今朝は聖書をお持ちで、すでにヨハネによる福音書第6章を開いてくれていることを願う。もしそうでないなら、今すぐそうすることをお勧めする。
 3. 私の聖書からこの箇所を読み上げる。私が読むのはNKJV版だ。別の訳を読んでいる場合でも構わない。私が読むのに合わせて、各自の聖書でできるだけ追いかけてほしい。

4. 神と御言葉に敬意を表して、皆さん、立ち上がってほしい。ヨハネは、イエスの「命のパンに関する説教」の記述を続け、60節で次のように記している……（R & P）

II. 概要

- A. 今朝の聖書箇所では、天からのパンについての教えの後、イエスの弟子たちが示した四つの異なる反応について読まれた。
1. さて、まず最初に、イエスの弟子たちについて語る際、彼らが誰を指すのかに留意することが非常に重要だと思う。
 2. ギリシャ語のこの言葉は「マテス」[math-ay-tes]であり、「学ぶ」という語根に基づいている。「マテス」とは、学び手、弟子、つまり他者——通常は何らかの師や教師——の教えを受ける者のことだ。
 3. これが、ギリシャ語におけるこの言葉の基本的な意味だ。新約聖書では、この言葉は時に、より重要な意味を帯びることもある。
 4. 「マテス」は、単なる弟子や学習者以上の意味を持つことがある。
 5. 私が読んだある聖書辞典によると、この言葉は「与えられた教えを受け入れ、それを自らの行動規範とする信奉者」を表すために用いられている。（ソディアテス）
 6. この言葉には「従者」という概念が含まれている。多くの場合、弟子とは信者であり親しい従者であるが、新約聖書全体を通じて、それほど献身的ではない関係が示されることもある。
 - a. マタイの福音書には、まだ死んでもいない父親をまず葬りに行きたいと願ったイエスの弟子の話が記されている。要するに、この弟子がイエスに求めていたのは、「まず父が亡くなるのを待って相続分を受け取ってから、あなたに従う」ということだった。しかし、イエスは彼にこう言われた。「わたしに従いなさい。死者を葬るのは、死者自身に任せておきなさい。」（マタイ8:22）
 - b. イエスの真の弟子となることは、決して簡単なことではなかった。そこには犠牲が求められた。代償が伴い、誰もがその代償を払おうとするわけではなかった。主のために自分の命や楽しみ、夢を犠牲にすることを拒んだ者もあり、彼らはイエスの弟子として長くは続かなかった。
- B. 今朝の聖句で、ヨハネは「弟子」という言葉を広義に用いて、様々な理由でイエスとその教えに従っていた人々を指している。
1. 他の人たちよりも献身的な者もいれば、これから見ていくように、弟子としてイエスに従い続けることをやめようとする者もいた。状況が厳しくなり、中にはもはやイエスに従う気はないと決めた者もいたのだ。
 2. ヨハネはまた、十二使徒を指す際にも同じ言葉を用いるが、彼らと他の集団とは区別している。イエスに従う弟子や信者には様々な種類がいたが、彼らは、イエスが地上の宣教において福音のパートナーとして自ら選んだ十二使徒とは同じではなかった。

C. 本文のアウトラインを作成したい方のために、私はこの箇所を四つのセクションに分け、それぞれイエスの弟子たちの異なる反応を取り上げるようにした。

D. まず、イエスの教えに対して一部の弟子たちが不平を漏らした様子を詳しく記している最初のセクションから学びを始めよう。本文の冒頭にある60節と61節を見てほしい。

III. ヨハネ6:60-61; イエスについて不平を漏らした者たち

A. この箇所の冒頭では、弟子たちのグループと、イエスの教えに対する彼らの反応について記されている。61節の前半では、イエスの弟子たちがその教えについて不平を言った様子が描かれている。

1. この「不平を言った」という言葉は、先週の聖書の箇所である41節と43節で、宗教指導者たちの行動を表すために使われた言葉と全く同じだ。

a. 宗教指導者たちは、イエスが「天から下ってきたパン」であると語ったことを理由に、イエスに不平を言ったのだ（ヨハネ6:41）。

b. そしてイエスは、弟子たちが互いに「つぶやき」（ギリシャ語では同じ語）を止めるよう命じなければならなかった。（ヨハネ6:43）

C. 先週指摘したように、この言葉の意味には、ぶつぶつと不平を漏らすこと、小声で何かを言うこと、あるいは自分やすぐそばにいる人たちにひそかに話すという概念が含まれている。これらは公然と口に出された不満ではなかった。

2. イエスの弟子たちは、心の中で、そして小声で、こうしたことについて不平を言っていたのだ。

3. しかし、それにもかかわらず、イエスは彼らが何を考えているか、何についてつぶやいているかを知っていた。61節には、イエスが「ご自身の中で」彼らが不平を言っていることを知っていたと記されている。

4. イエスは彼らの心を知っていた。彼らが何を考えているか、何を言っているかを知っていたのだ。イエスは御自身の内側でそれを知っていた。彼らが何を言っているか、何を考えているかを知るために、彼らの言葉を聞く必要はなかった。

5. そしてこれはもちろん、イエスの全知を物語っている。イエスは私たちのことをすべて知っている。私たちがする行いや口にする言葉だけでなく、私たちが抱く思いも、心の奥底で何が起きているかも知っているのだ。

a. 私たちが小声でつぶやいたり、不平を言ったりすることのすべてを、主は知っている。主から隠れるものは何一つない。

i. ヘブライ人への手紙4章13節はこう証言している。「神の御目から隠れる生き物は一つもなく、すべてのものは、私たちが説明責任を負わなければならない方の御目には、むき出しでさらけ出されている。」（ヘブライ4:13）

b. 私たちは友人や同僚、あるいは家族の一部、そして最も身近な人々を欺くことはできるかもしれない。しかし、主を欺くことはできない。

i. パウロはガラテヤ人への手紙でこう述べている。「だまされてはならない。神は侮られる方ではない。人は何を蒔くか、その収穫を刈り取ることになるからだ。」（ガラテヤ6:7）

ii. エレミヤは、主を、私たちの心をすべて探り、思いを試し、それぞれの行いに応じて、その行いの実に応じて報いる方として描いている。（エレミヤ17:10）

C. 主の弟子たちは、宗教指導者たちと同じように密かに不平を漏らしていたが、イエスは彼らが心の中で何を考え、小声で何を言っているかを正確に知っていた。

6. イエスの模範に従い、その教えに耳を傾ける代わりに、これらの弟子たちは宗教指導者たちの模範に従い始めていた。

B. 弟子たちは、イエスの教えを「聞きづらい言葉」だと言った。つまり、それは硬直的で、堅苦しく、厳しいものだったという意味だ。

1. この言葉は、人を不快にさせるものを指すのに使われる。この言葉は、穏やかな言葉や優しく語られる言葉とは対照的に用いられる。これらは厳しい言葉、不快な言葉、過酷な言葉、妥協を許さない言葉である。

2. そして実際、弟子たちの中には不快に感じた者もいた。イエスは61節の終わりに、「これによって、あなたがたはつまずくのか」と修辞的な問いを投げかけているからだ。

3. ギリシャ語で「不快に思う」を意味するこの言葉は「スカンダルゾ（skandalizo）」だ。そこから派生した英語の「スキャンダルイズ（scandalize）」という言葉も、まるで耳に聞こえるかのように感じられるだろう。

a. この言葉は、不快にさせる、苛立たせる、あるいはスキャンダルを引き起こすという意味だ。イエスは、ご自身の教えについて不平を言っていた弟子たちに問いかけ、率直にこう尋ねた。「私の教えは、あなたたちを不快にさせるか？ 気にかかるか？ スキャンダルだと思うか？」

b. この言葉は、しばしば「つまずきの石」を指すのに使われていた。イエスは、自分の言葉が弟子たちにとってつまずきの石になっているかどうかを尋ねたのだ。「私の言葉によって、君たちはつまずき、転んでしまうのか？ 私の言葉は君たちにとって不快なものなのか？」というのがその趣旨である。

4. ここで私たちが認識すべきことがある。イエスは、自分の言葉や教えが人々の反感を買うことを気にしてはいなかった。人々に好かれるためだけに、メッセージを和らげたり、変えたりしようとはしなかった。イエスは、自分がつまずきの石であることを知っていたし、自分のメッセージが反感を買うことも分かっていただ。

a. イエスは当時の偽善的なパリサイ人たちを厳しく非難したが、その後、弟子たちがやって来てこう言った。「パリサイ人たちは、この言葉を聞いて不快に思っていることを、ご存知ですか？」（マタイ15:12）

i. イエスの答えはこうだった。「彼らを放っておきなさい。彼らは盲人の導き手である。（マタイ15:14）

ii. イエスは引き返して謝罪したりはしなかった。「ごめんなさい。どう償えばいいか、どうすれば私の言葉をあなたがたが受け入れやすく、理解しやすくなるか」などと言うこともなかった。

b. パウロとその仲間たちが宣べ伝えた福音のメッセージは、人を不快にさせるものだった。コリントの信徒への手紙第一1章23節によれば、それはユダヤ人にとってはつまずきの石であり、異邦人にとっては愚かさにも過ぎなかった。（1コリント1:23）

- C. ペテロは預言者イザヤの言葉を引用して、イエスを「つまずきの石、妨げの岩」と呼んでいる。(イペテロ2:8)
5. 実のところ、**福音のメッセージは不快なものである**。ある人々にとってはつまずきの石だ。しかし、イエスは、より多くの人々に従ってもらうために、そのメッセージを変えはしなかった。
6. そして、それが今日私たちが抱える大きな問題だ。人々は、福音のメッセージをより受け入れやすくし、人々が受け入れやすいように変えようとする。
- a. 人々は、福音はもっと文化的配慮が必要だと言い張ろうとする。そして、今日の文化に合わせるために福音を改変すべきだと主張する。今日の世界により関連性を持たせ、より包括的で、すべての人に開かれたものにするためだと。
- b. しかし、それはイエスがなされたやり方ではない。イエスは文化に合わせてメッセージを変えなかった。物事はそうあるべきではないのだ。福音は恥じることなく宣べ伝えられるべきであり、文化を変えるべきであって、その逆であってはならない。
- C. イエスは変わることがなく、その福音のメッセージも変わらない。イエスが「昨日も今日も、そして永遠に変わることのない方」であると同様に、その福音のメッセージと教えもまた変わらないのだ。イエスは、自分のメッセージが人々の反感を買うことを知っていたが、それゆえにそれを変えることはなかった。イエスは弟子たちに、そのメッセージに忠実であり、それに従うよう求めたのだ。
- C. 60節の弟子たちは、その言葉は聞きづらいものだとし、「誰がこれを理解できようか」と問いかけた。
1. ここで興味深い点がある。60節の途中で「聞いた」と訳されている言葉と、60節の終わりで「理解する」と訳されている言葉は、まったく同じ言葉だ。それは「akouo」[ak-oo-o]という語であり、文字通りには「聞く」という意味だが、比喩的には「従う」という意味で使われている。
2. イエスのこの教えが理解しにくかったわけではない。聞くのが難しかったのだ。耳を傾けるのが難しかったのだ。弟子たちはイエスの言うことを気に入らなかった。イエスが教えたことを従い、実践するのが難しかったのだ。
3. 彼らがイエスの言っていることを理解していなかったわけではない。彼らはイエスの言葉を理解していたが、それを聞きたくなかったのだ。イエスの言葉を行動に移し、その教えを実践して生きたくなかったのだ。それは彼らの生き方や、自分たちが望むやり方に合わなかったのだ。
4. もちろん、主の弟子たちとして、彼らは以前イエスが語ったり教えたたりした多くのことを喜んでいて。愛や恵み、赦しについてイエスが語ることは好きだったが、イエスに参与し、イエスと一つになるというこの考えは、彼らには受け入れがたいものだった。
5. これは、私が「サラダバー・キリスト教」と呼んでいるものを思い起こさせる。「サラダバー・キリスト教」とは、福音やイエスの教えを、まるで食べ放題のサラダバーのように扱い、自分たちが一番好きなものだけを拾い集めて選ぶような態度のことだ。

- a. 私たちは神の愛や恵み、赦しを山盛りにする。神の憐れみや慈愛は、おかわりしたいほどだ。ああ、カリカリのベーコンの粒のように、あちこちに散りばめられた祝福も少しもらおう。
- b. しかし、聖さとなるとそれをスルーし、犠牲となると見送ってしまう。互いに仕えること？ まあ、少しならいいが、あまりやりすぎはしない。迫害？ 絶対に嫌だ。あれはまるでサラダバーのピーツのようなもので、誰も欲しがらない。
- C. お気に入りのものをすべて盛り付けたプレートを手にし、それをキリスト教と呼ぶ。だが、それは全くキリスト教ではない。少なくとも、聖書に記されたキリスト教ではない。
- d. どの教えを気に入るか、どの教えを許容するか、どの教えを拒絶するか、といったように**選り好み**をすることは許されない。
- e. イエスは私たちにそのような選択肢を与えてはいない。私たちはイエスの教えをすべて受け入れなければならない。神の言葉こそが、クリスチャンとして、またキリストの弟子として私たちが人生を歩むべき、権威ある基準なのだ。
- f. 福音やイエスの教えが受け入れがたいものであろうと、今日の世界の文化にそぐわないものであろうと、問題ではない。クリスチャンとして、私たちは御言葉に忠実である。それを恥じることはない。
- g. パウロはローマ人への手紙の中でこう書いている。「私はキリストの福音を恥じない。それは、信じるすべての人、まずユダヤ人、そしてギリシャ人にとっても、救いへの神の力だからである。」(ローマ1:16)
6. これらの弟子たちは、イエスの教えに不快感を抱いた。そこで彼らはそれについて不平を言い、不平を漏らしたが、イエスは彼らにそのことを突きつけた。イエスは彼らの言い分をそのまま通すことも、彼らのために御言葉を和らげることもなかった。
- D. 62〜66節の次の箇所を見てみよう。そこには、イエスの教えに対して弟子たちが示した他の反応がいくつか記されている。

IV.

ヨハネ6:62-66; **イエスから離れていった者たち**

- A. 66節で、イエスの弟子たちの一部がイエスから離れていったことがわかる。彼らは結局、もはやイエスと共に歩まなくなったのだ。彼らは引き返したとあるが、文字通り「後ろへ」行ったということだ。その言葉はそういう意味を持つ。
1. そして、この表現は、これらの弟子たちについて驚くほど鮮明な情景を私たちに描き出している。そこには、彼らが当初は最前列でイエスの話を聞いていたが、その教えを聞き、その言葉が自分たちにとって耐え難いものとなったとき、ぎこちなくその場から離れ始めたという含意がある。
2. 彼らは静かに後方に下がり、かつては最前列で積極的にイエスに寄り添っていた仲間から、群衆の中に溶け込む存在へと変わっていった。後ろへと忍び込み、背景に溶け込んでいくうちに、自分たちとイエスとの距離をますます広げていったのだ。
3. 後ろへと流れていくことで、彼らは意図的に自分たちとイエスとの間に物理的な距離を置き、群衆の最後尾にたどり着くと、単にイエスと共に歩くのをやめたのだ。彼らはもはやイエスと共に歩かなかった。

4. そして、私たちが信仰から後退したり、イエスから遠ざかってしまったりするとき、私たちの人生でもよくこのようなことが起こる。たいていは、イエスを即座に拒絶するわけではなく、ゆっくりとイエスから遠ざかっていくことで、やがて群衆の最後尾に追いやられたり、さらに悪い場合には、もはやイエスに従わなくなったりするのだ。
5. だからこそ、イエスのそばに寄り添い、イエスにとどまることがこれほど重要なのだ。イエスはこう言われた。「わたしはぶどうの木、あなたがたは枝である。わたしにとどまり、わたしもその人にとどまる者は、多くの実を結ぶ。わたしなしには、あなたがたは何もできないからだ。もしだれかがわたしにとどまらないなら、その人は枝のように切り捨てられ、枯れてしまう。そして、人々はそれを集めて火に投げ込み、燃やしてしまうのだ。」（ヨハネ15:5-6）
6. 教会の家族よ、イエスにしっかりと寄り添え。後ろにこそこそと下がったり、後方に流されたりしてはならない。**キリストにとどまり**、主のために多くの実を結べ。
- B. 弟子たちは、イエスが天から下って来たと言われたことや、御自身の肉と血を食すよう勧められたことに、不快感を抱いた。
1. イエスは、「もしあなたがたが、人の子が、以前におられた所へ昇るのを見たら、どうするつもりか」と問いかけることで、彼らの考えに異議を唱えたのだ。
2. イエスは要するに、「私が天から降りてきたと断言する私の教えを受け入れられないのなら、私が肉体をもって天に昇り、実際に天に帰っていくのを目撃したとき、どうするつもりなのか」と言っているのだ。
- C. イエスは、命を与えるのは御霊であり、肉は何の役にも立たないと述べている。そして、「わたしがあなたがたに語る言葉は霊であり、命である」と言って、彼らにそれをはっきりと伝えている。
1. イエスは比喩的に語っており、文字通りの意味ではない。彼は肉体的なことではなく、霊的なことを語っているのだ。
2. 永遠の命は、肉体的なものに基づいているわけではない。それは肉に基づいているわけでも、肉において何かを行うことによるものでもない。肉は何の益ももたらさない。それは肉体的な行為や出来事に関するものではない。肉のために食べたり飲んだりしても、霊的な命や永遠の命に関しては何の役にも立たない。
- a. 肉体的な行為として肉と血をいただくことは、あなたを救わない。それは命を与えない。イエスはここで霊的な意味で語っているのだ。
3. そして、命を与えるのは御霊である。
- a. これは注目すべき点だ。というのも、先週の聖句で、イエスは「まことに、まことに、あなたがたに告げる。わたしを信じる者は、永遠の命を持っている。」（ヨハネ6:47）と明確に述べられていたからだ。
- b. そしてイエスはこうも言われた。「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者（比喩的、霊的な意味で、イエスに参与し、イエスと一つになることを指す）は、永遠の命を持ち、わたしは終わりの日にその人をよみがえらせる。（ヨハネ6:54）
- C. つまり、イエスは明らかに私たちの救いの体験の一部である。イエスはその過程に関与している。私たちが永遠の命を得るためには、イエスを信じなければならない。
4. そしてここには、聖霊も関わっていることがわかる。なぜなら、命を与えるのは御霊だからだ。

- a. 以前、イエスがニコデモと交わした会話を覚えているだろうか。イエスはニコデモにこう言った。「まことに、まことに、あなたに告げる。人は水（肉体的な誕生）と御霊（霊的な誕生）によって生まれなければならない。神の国に入ることはできない。肉から生まれたものは肉であり、御霊から生まれたものは霊である。」（ヨハネ3:5-6）
- b. 永遠の命、すなわち天にある神の御国に入ることは、新たに生まれ変わり、御霊によって生まれなければならない。
- C. それはどのようなものだろうか。ヨハネによる福音書第14章には、その様子が簡潔に記されている。イエスはこう言われた。「真理の御霊【聖霊】は、世は受け入れることができない。世は御霊を見ず、また御霊を知らないからである。しかし、あなたがたは御霊を知っている。御霊はあなたがたと共に住み、あなたがたのうちにあられるからだ。」（ヨハネ14:17）
- d. 聖霊はイエスの弟子たちと共にいた。しかし、やがて聖霊が単に弟子たちと共にいるだけでなく、弟子たちの内側に宿る日が来るはずだった。これは私たちの救いの体験を物語っている。
- e. 聖霊は私たちと共にいて、私たちのそばに寄り添い、ヨハネ16章8節に従って、罪、義、さばきについて私たちを責める。（ヨハネ16:8）
- f. 聖霊は私たちと共にいて、私たちをイエスへと引き寄せてくれるが、私たちの中にいるわけではない。私たちがイエス・キリストに完全な信仰を置くまで、聖霊は私たちの中に入ってはこない。そうして初めて、聖霊は私たちの中に入り、私たちの内に住み着き、私たちの救いの保証人として私たちに印を押してくれるのだ。
- i. パウロはエペソ人への手紙の中で、次のように記している。「あなたがたもまた、真理のことは、すなわち、あなたがたの救いの福音を聞いた後、キリストを信じた。そして、キリストを信じたとき、約束の聖霊によって封印された。この聖霊は、買い取られた所有物が贖われる時まで、私たちの相続財産の保証であり、神の栄光を称えるためのものである。（エペソ1:13-14）
- g. このように、聖霊はイエスと共に、私たちの救いにおいて重要な役割を果たしていることがわかる。
5. しかし、父なる神もこのことから除外されているわけではない。本文を見ると、6節でイエスはこう言われている。「それゆえ、わたしはあなたがたに言った。『わたしの父によって許されない限り、だれもわたしのものに来ることはできない』と。」
- a. つまり、私たちの救いは、イエスの十字架上の御業やその後の復活、そしてその成し遂げられた御業への私たちの信仰に依存しているだけではない。聖霊が私たちの罪を自覚させ、イエスへと引き寄せくださることも必要だ。そして忘れてはならないのは、これらすべては、父なる神によって私たちに許されなければならない、決して起こり得ないということだ。
- b. **三位一体の神**の三つの位格すべてが、私たちの救いと永遠のいのちの賜物に密接に関わっている。私たちは完全に主に依存している。私たちの救いは100%神の御業であり、それは父なる神、子なる神、そして聖霊なる神によるものだ。

D. さて、本文の第三のセクションに進もう。全部で四つあると言った。これまでに、弟子たちの反応を見てきた。中には不平を言う者もいれば、立ち去る者もいたが、信じた者もいた。67～69節を見てみよう。

V. ヨハネによる福音書6章67～69節；**イエスを信じた者たち**

A. イエスはそれまで、かつてイエスの弟子であると名乗っていた群衆や大勢の信者たちに対応してきた。しかしここで、イエスは十二使徒に目を向ける。イエスが自ら選び出し、自分に従い、福音を宣べ伝えるパートナーとして共に歩むよう選んだ者たちだ。イエスは彼らに向き直り、「あなたたちも去りたいのか」と問いかけた。

1. イエスは自らこの者たちを選んだにもかかわらず、彼らにも立ち去る機会を与えたのだ。イエスから離れる機会を。
2. これは私たちの自由意志を物語っている。神は、私たちが進むべき道を自ら選ぶ能力を授けてくださった。たとえイエスがこれらの者たちを選び、彼らを召したとしても、彼らには立ち去る自由があったのだ。

B. 神は私たちが深く愛しておられるため、私たちを創造された際、自由意志を与えてくださった。**愛には選択が求められる**からこそ、神は私たちに自ら選ぶ能力を与えてくださったのだ。

1. 神は、単に私たちが神を愛するように造ることもできた。私たちが常に神を愛し、決して神に反抗せず、神のあらゆる命令に常に従うような存在として、私たちを創造することもできたのだ。しかし、それは愛ではない。
2. 愛には選択が求められる。神は私たちを愛しておられる。神は私たちを選んでくださった。しかし、神は私たちにもその愛に応えてほしいと願っておられる。すなわち、神を愛し、神を選ぶことを望んでおられるのだ。神は私たちに神を愛するよう強制はしないが、私たちに神を愛してほしいと切に願っておられる。私たち一人ひとりに、神を愛し、神のために生き、神が私たちの人生に定めた御心に従うかどうかの選択が与えられている。

C. ペテロはこう答えた。「主よ、私たちは誰のところにへ行けばよいのか。命の言葉をお持ちなのは、あなただけだ。」

1. ペテロは理解していた。少なくとも、この瞬間、この場面においてはそうだった。ペテロは、まず行動した後で考える、性急な人物として描かれることが多い。しかし、ここでは彼は正しく理解している。
2. 「他にどこへ行けばいいというのか。他に誰が私たちに永遠の命について教えてくれるというのか。他に誰が私たちに永遠の命を与えてくれるというのか。」他に誰もいない。よくやった、ペテロ、よくやった。
3. 永遠の命は、**イエス・キリスト以外にどこにも見出せない**。他の場所へ行くことは、永遠の命を放棄することだ。別の道を探したり、複数の道があると言ったりすることは、誤りであり、的を外すことだ。
4. 神と永遠の命に至る道がただ一つしかないという考えを好まない人もいる。彼らは、それがあまりにも排他的だと考える。私は、神が私たちのためにそれをとても簡単にしてくださったのだと考えたい。神は、私たちにいくつかの選択肢を与える代わりに、それを極めて単純にしてくださったのだ。父なる神に至る道はただ一つ、それは御子を通る道である。
5. ヨハネによる福音書14章6節によれば、イエスは道であり、真理であり、命であり、御父のもとへ行く者は、だれもイエスを通らなければいけない。（ヨハネ14:6）

D. ペテロは、自分たちには他に頼るべき人はいないと大胆に宣言し、「私たちは、あなたがキリスト、生ける神の御子であることを信じ、知った」と述べたとき、グループ全員を代表して語っていたのだ。

1. ペテロが語った順序に注目してほしい。彼は「私たちは信じるに至り、知るに至った」と言った。そして、この順序はここで重要だと私は思う。

- a. 信じる前に知りたいと願う人は多い。彼らはすべての事実を知りたいが、イエスが本当にご自身が語られた通りの方であることを確実に知りたいと願う。イエスが本当にキリスト、すなわちメシアであったこと。イエスが本当に生ける神の御子であったこと。
- b. そして、彼らは、一度知れば信じるようになると思っている。しかし、物事はそうはいかない。まずイエスを信じ、信仰を置く。そして、その信仰を生き抜く中で、イエスをますます深く知っていくのだ。
- c. それは、主との継続的な関係を築いていくことだ。それは、信仰の一步を踏み出し、イエスに信頼を置くことから始まる。そして、イエスを知るという理解へと発展し、残りの人生において、日々その知識を深めていくのだ。

E. そして、ペテロの大胆な宣言を称賛する一方で、彼が他の弟子たち全員について述べた主張は正しくなかったという事実を指摘せざるを得ない。

1. ペテロは、他の弟子たち全員が「他の場所には行きたくない」という自分の意見に同意しており、イエスがキリストであり、生ける神の御子であるという結論に達していると、誤って思い込んでいたのだ。
2. なぜなら、彼らのグループの中には、信じていない者が一人いたからだ。私がこのことを取り上げるのは、私たちの救いと永遠の命に関わる極めて重要な真理を強調するためである。
3. 救いとは、**誰も自分自身で下さなければならない選択**だ。他人が代わりに選ぶことはできない。ペテロには信仰があった。そしてそれは成長しつつある信仰だった。しかし、彼は他の誰かの代わりに発言することはできなかった。救いは誰もが下さなければならない個人的な決断であるため、彼は自分自身についてしか語るができなかったのだ。
4. 神は私たち一人ひとりの前に選択を提示している。それは私たち全員が下さなければならない決断だ。そして、イエスに関して中立という立場は存在しない。あなたはイエスの味方が、それとも敵か、どちらかだ。未決定の投票は、イエスに対する反対票に他ならない。
5. あなたは、神の御子を通して神へと至る、唯一無二の道を、受け入れて受け取ることを選ばなければならない。すべての人は、神に従うか、自分の道に行くかを選ぶなければならない。
6. 神は、私たちが神を選ぶことを望んでいる。神は、私たちがキリストを選ぶことを望んでいるが、キリストを選ばせることはしない。私たちは自分の道に行くことも、世のやり方に従うことも、あるいは別の道を探そうとすることさえできるが、そのどれ一つとして、天の父のもとへ導くことはない。他のすべての道は、結局、あなたが迷い、神から永遠に隔てられる結果となる。
7. 神は私たちの前に、生と死、祝福と呪いを提示し、私たちが生きるために生を選ぶよう懇願しておられる。そうして私たちが天において神との永遠の

交わりを享受できるように。私たちの罪が赦され、永遠に神と和解できるように。

F. 私はペテロの熱意が大好きだが、彼は自分自身についてしか語れない。信仰とは、イエスを信じるという、私たち一人ひとりが自ら下さなければならない個人的な決断だからだ。

G. 最後に、これらの節を見て、今日の集いを締めくくろう。70〜71節だ。

VI. ヨハネ6:70-71; イエスに引き渡された一人

A. イエスは弟子たち一人ひとりを自ら選んだ。イエスは山に登り、一晩中祈り続けた。弟子たちのために祈り、神に祈り、弟子たちについて、また誰が「使徒」という称号を与えられる12人のグループになるかについて、父なる神の御心を求めたのだ。(ルカ6:12)

1. 主と共に一晩中祈りを捧げた後、イエスは弟子たちを集め、その中からペテロとアンデレ、ヤコブとヨハネを選ばれた。また、フィリポとバルトロマイ、マタイとトマス、アルフェウスの子ヤコブ、熱心党のシモンを選ばれた。さらに、ヤコブの子ユダとイスカリオテのユダという、同じ名前の二人の男も選ばれた。(ルカ6:13-16)

B. 主が選んだ十二人のうち、一人は悪魔だった。「悪魔」という言葉は名前ではなく、形容語である。

1. ギリシャ語では「ディアボロス」といい、文字通り「偽りの告発者」を意味する。私の聖書辞典では、この言葉を「理由もなく人々を偽って告発し、分裂させる者。彼は告発者であり、中傷者である」と定義している。
2. ユダにこの形容が与えられたのは、最終的にイエスを裏切り、銀三十枚と引き換えに宗教指導者たちの手に引き渡すのが彼になるからである。
3. その夜、イエスは過越の食事の席に着き、弟子たちと共にパンと杯を分かち合った。その同じ夜、イエスはタオルを取り、それを腰に巻き、ユダを含めすべての弟子たちの足を洗った。その同じ夜、イエスはユダと同じ鉢にパンを浸した。その同じ夜、ユダはイエス・キリストの告発者であり裏切り者になってしまうのだ。
4. イエス自身の弟子の一人が、イエスを裏切り、敵対するようになるなどとは、驚くべきことだ。何年もイエスと共に歩んできたにもかかわらず、ユダはイエスにうんざりし、私たちの罪のためにイエスが十字架にかけられるよう、進んでイエスを宗教指導者たちに引き渡したのだ。

C. この事実は確かに驚くべきものだ。しかし、最終的に私の心に強く残ったのは、ユダがイエスを裏切ったということではなかった。なぜなら、私は人間の心の墮落を知っているからだ。私にもその心があり、あなたにもあるのだから。

D. いいえ、私の心に強く響いたのは、ユダがイエスを裏切るという選択をしたことではない。イエスが、ユダが自分を裏切ることを十分に承知の上で、あえてユダを選んだという事実だ。

1. 本文の64節は、イエスが最初から、誰が信じない者であり、誰が最終的に自分を裏切る者であるかを知っていたと教えている。
2. イエスは、ユダが自分を裏切ると知っていた。イエスは、ユダが最後まで付き添えないことも知っていた。それでもなお、イエスは彼を愛した。それでもなお、彼を選んだ。それでもなお

彼に、イエスと共に歩み、イエスから学び、自分の命をイエスに委ねるためのあらゆる機会を与え続けたのだ。

3. ユダがイエスを愛し返さなかったにもかかわらず、イエスは彼を愛した。聖書は、私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにおいて、神が私たちに對するご自身の愛を示されたと宣言している。(ローマ5:8)
4. 神の愛は、私たちが愛すべき人間であるという事実に基づいていたわけではない。私たちがまだ罪人であった時、罪の中に絶望的に迷い、神とは一切関わりたくなかった時に、キリストは私たちのために死んでくださったのだ。
5. イエスはこの地上に来て、完璧な生涯を送り、ただ私たち全員——イエスとは一切関わりたがらなかった罪人たちの群れ——のために、進んでその命を捧げたのだ。
6. それこそが、私の心を打ちのめす。私たちが神と関わりたくなかったにもかかわらず、イエスが私たちを選んでくださったという事実が、私の心を打ちのめすのだ。多くの人々が神を選ばないことを知りながら、神は私たちを選んでくださった。それこそが真の愛だ。それこそが無条件の愛だ。それこそが、神が私たち一人ひとりに対して抱いておられる愛なのだ。

E. イエスはユダを選んだ。ユダは別の道を選ぶことを選んだ。彼はイエスを裏切り、当局に引き渡すことを選んだのだ。

1. 神は私たちを選んでくださった。神は私たちを愛し、その愛を、御子を遣わして私たちの代わりに死なせることで示してください。しかし、私たちには依然として、神を選ぶという責任がある。
2. 私たち全員のために、神の愛に応え、神を選ぶことができるよう祈る。天からのパンをいただき、二度と飢えも渴きも感じない道を選ぶことができるよう。アーメン? アーメン。